
都市の音楽芸能をフィールドワークする

～音楽資料編（台北および香港）～

増山賢治 愛知県立芸術大学音楽学部教授（音楽学）

はじめに

筆者は「都市の音楽芸能をフィールドワークする」と題した拙稿2篇（台北編と香港編）において、台北および香港で訪れた音楽芸能の主要上演スポットと、見聞したコンサートやイベントを通して受けた印象をもとにその音楽事情を記し、同時に台湾（台北）、香港の音楽事情の大きな変化とそれに対する日本の認識の遅れを指摘した¹。本稿はそれらを受けてその総括として両地で収集した音楽資料（文字、映像など）から得た諸情報を整理、分析することによって、それぞれの地の音楽事情へのより深い理解を目指すものである。以下、それらの音楽資料を文字資料と録音・映像資料に二分し、台北、香港の順でそこから得られる情報や知識、および導き出される研究上の諸問題を記述する。

まず、資料の種類だが、ここでいう文字資料とは、チラシ（leaflet）や小冊子（brochure）といった無料配布されているものすべてを指し、原則としてチラシ類を「」、小冊子類を『』で表記する。そして、書籍・雑誌とは公刊された有料の出版物を指し、録音・映像資料とはCD、DVDといった市販されているいわゆるAV資料である。筆者の認識においては、中国音楽研究におけるそれらの重要性は言うまでもなく明らかであるが、実際、中国大陆、香港、台湾以外の地域を対象としているアジア音楽研究者の間で、それがどれだけ正確に認識されているかとなると、一部を除いて依然として多少の疑問が残ると言わざるを得ない。フィールドワーク中心、あるいは楽器、歌、舞踊といったパフォーマンスの習得に重きを置くという研究の手法や立場からすれば、先行研究としての文献さらに資料的価値の高い録音・映像資料の存在に対する認識は、それぞれが対象とする地域によってその事情は一様ではないからである。そういう意味で、今回収集した諸資料は早晚、詳細に内容的な吟味がなされた上で、その研究資料としての価値に最終的な判断が下されるべきものではあるが、今回はその糸口をつかむという主旨から、それらの選定理由の説明を中心に、筆

者の中国音楽研究の中で、今後それらがどのように活用される可能性があるかという点だけでも示しておきたいと考える。

1. 台北で収集した音楽資料

1980年代後半の台湾社会に起きた大きな変化、すなわち、戒厳令の解除以降、政治経済をはじめあらゆる分野で開放政策が採られてから、大陸、香港との交流が活発化、恒常化して新しい局面を迎えたことによって、台湾の音楽文化（本省系および外省系の新旧の音楽芸能）がどのような変化を見せたか？ その研究状況も含めてそれらの現状を探るのが昨年（2013年）1月初旬に筆者が台北で展開したフィールドワークの主な目的であった。

従って、音楽資料の収集も上記の視点に基づいて遂行され、その収集結果のリストは冒頭で言及した拙稿2篇に掲載されているが、本稿における説明の便宜上、末尾にそれらを再録して、包括的な内容のものを先に、次に個別ジャンルを対象として扱ったものを続ける形で記述する。



写真1 誠品書店

諸資料の選定、購入に際しては、チラシ類、小冊子類は各上演スポットを訪れた際に目に止まったものを随時収集したが、書籍や雑誌の場合、購入予算の制限やそれらを日本へ郵送する際の量を考慮しながら、それが台湾の音楽文化をどのようにとらえて説明しているかに着目して選定するという方針のもと、台湾の音楽を概観できる内容のもの（概論や通史の類）を優先的に購入した。そして、個別の音楽ジャンルでは外省人を中心に享受されて来た京劇と、台湾本来の伝統音楽に関する2タイプを集めることを心掛け、尚且つジャンルを問わず内容的に見て、台湾と大陸の交流についての言及の如何をも考慮した上で購入した。本稿の末尾掲載のリスト中、入手場所が香港であっても、内容が台湾に関する一部のものについては、本項で扱うこととし、音楽ジャンル別にその選択理由とともに概観する。



写真2 中国音楽家書房の入口にある大陸の書店との提携を示す看板

(1) 文字資料

a. チラシ・小冊子類

このタイプの資料の中では、まず『台北市立国楽団 2012/2013 楽季手冊 (season brochure)』が、それをざっと目を通してだけでも、大陸や香港の演奏団体の公演がもはや間断なく行われている様子をつぶさに見取ることができるという意味で、比較的充実していると感じられた。例えば、大陸の中央広播民族楽団の芸術監督である指揮者の彭家鵬が同楽団のコンサートにはじめて客演として登場し、趙季平《マカオの印象》、唐建平《マカオ詩編》ほか大陸の作品を演奏している（2012年9月8日、台北市中山堂中正庁）。そして、2012年11月17日には、大陸出身で香港中楽団の芸術監督、指揮者の閻惠昌も同楽団に客演として出演し、台湾初演となる趙季平作曲の《莊周夢》、鍾耀光作曲による笙の協奏曲《匏楽》などを演奏している。ちなみに後者の曲のソリストを務めた陳奕瀛は台湾出身で現在、香港中楽団の団員であり、いわば故郷に錦を飾ったといえる。それから、2012年の11月25日には大陸の著名な琵琶演奏家、林石誠のメモリアルコンサート（中国語のタイトルは「四絃千遍語浦東派宗師林石誠琵琶紀念音樂会」）が中山堂中正庁で行われており、出演者は呉蠻、章紅艷ら林石誠の高弟5人で、当代随一の琵琶演奏家がずらり顔を揃えている。プロデューサーは台湾の林谷芳が務めており、コンサート前日にはコンサート出演者（演奏家）の一部と大陸の音楽学者、喬建中、袁静芳によって林石誠の琵琶芸術に関するフォーラムも開催されている。また、台北新劇団と台北市立国楽団の主催による新作京劇の公演《知己》が2013年5月24日～26日に新舞台で予定（当時）されており、同劇の節付けは大陸の著名な劇音楽編曲家、朱紹玉が担当し、出演者は大陸出身で今や台湾の京劇団のトップスターとして活躍している李寶春ほかという強力な布陣である。残念ながら筆者は台北滞在期間中、同楽団のコンサートを聴く機会はなかったが、こうして冊子を収集したことによって大陸、香港、台湾の関係、交流の状況に新たな視界が開けた意義は大きい。



写真3 台北市立国楽団（台北市中正区中華路一段53号）

『国立中正文化中心 Monthly Program』（2013年1月、2月、3月）は文字通り、国立中正文化中心を構成する国家戯劇院と国家音楽庁という台湾を代表する2つのホールの上演スケジュールを知ることができる。そして、前掲の2点が冊子としても上演演目、曲目も中国音楽から西洋クラシックまでとオーソドックスであるのに対して、『表演36房』（2013年1月、2月、3月）はやや新しい傾向が感じられる。それによれば、同上演スポットは永安芸文館（英文表記は YONG AN ART CENTER）という組織が運営するパフォーマー養成所（英文表記は PERFORMING ARTS SCHOOL）のようで、同館の設備（5つの階それぞれに位置するホール、スペースなど）の紹介とともに、養成所の学生募集広告も掲載されている。それによれば、中国および西洋の楽器演奏と中国武術および中国舞踊と西洋ダンスを試験科目としていることから、楽器演奏と身体パフォーマンスを融合させた芸術表現を追求する人材の養成所と推測される。開設が2007年9月と新しく、その詳細については後述の『2012台湾表演団体体名録 Taiwan Performing Arts In Focus』掲載の「優表演芸術団」を紹介する記事が参考になる²。同上演スポットを訪れる機会を逃したのは残念だが、こうして文字資料を収集したからこそ、その存在を知ることが可能となり、

次回、台北に赴く機会があれば、台湾におけるクロスオーバーアートの状況を知るために現場を訪れてみたいという新たな興味関心を呼び起こす結果となった。

『台北市立社会教育館活動快訊』（2013年1月）は城市舞台（Metropolitan Hall）、大稻埕戲苑（Traditional Opera）、文山劇場（Wenshan Theater）、親子劇場（Family Theater）、社教館総館（TAIPEI CULTURAL CENTER）の催し物に関する情報が掲載されている。カッコ内の英文表記から中国、台湾の音楽芸能に直接関連するのは大稻埕戲苑らしいことが容易に察せられるが、実際、1月に歌仔戲と掌中戲（指人形劇）の公演が予定されていた（同書の pp.11-13）。チケット価格は、歌仔戲は台湾ドルで 100,200,300（一部 500 も）で、人形劇は 100 という設定である。その他、同戲苑は劇音楽を含む様々なジャンルのフィルム上演も行っており、その説明文によれば、民国 102 年から同活動が開始され、毎週水曜と日曜に劇音楽とそれに関連する各種パフォーマンスのフィルム上映があるという（同書の p.14）。同戲苑も自らの冊子『大稻埕戲苑看戲快報』（2013年1月、2月）を発行しており、そこにも同上の情報やシアターとスペースのレンタル料金表などが書かれている。場所は台北市大同区迪化街一段 21 号 8,9 楼。

次の個別の公演チラシについては、公演日時、場所、演目、チケット価格などを簡単にまとめる。劇音楽の内、まず筆者が観劇した京劇「小丑報到」（2013年1月4日～1月6日、中山堂）はシリーズ公演で筆者の観劇日（1月4日）以外の演目は5日の《小放牛》《打漁殺家》など、6日の《八五花洞》、《孔雀東南飛》など日本では絶対に見られないものが含まれている。特に5日の《打漁殺家》は出演者が普段の役種とは反対のもの、すなわち、女形は立ち役に、立ち役は女形でというように演じる一種の余興的演出による公演で、歌舞伎の「そり芝居」に似ており、是非見たいと思ったのだが、5日、6日のチケットともに完売で観賞することができなかったのは遺憾であった。そして、公演当日のプログラム冊子の折込みチラシや会場で集めたものにも興味深い公演情報が含まれていた。例えば「国立台湾戯曲学院京劇団 民国 102 年復興劇場公演スケジュール」（2013年1月19日～12月29日）では、「国光劇団 振袖と口紅（中国語では「水袖與胭脂」）」（2013年3月8日～3月10日、国

家戲劇院)は新作とはいえ、プロデューサー、ディレクター、歌唱・音楽監督などを明記するチラシは、まるで大陸の公演のような印象を受けた。「国光劇団 2013年上半期国光劇場公演スケジュール」は2013年4月13日、4月20日、4月27日、6月1日、6月2日で、古典を中心に日本ではまず観賞する機会のない演目で占められている。このほか、プロの公演ではないが、興味深いイベントとして「アマチュアの京劇歌唱コンサート」(2013年3月30日、14:30～ y17台北市青年育樂中心3樓劇場)があった。説明文に記されている「曲牌開場」から始まるプログラミングが、劇の上演ではもはやこうした器楽曲演奏によるオープニングはまず見られなくなったこともあって、本イベントに関心を抱いた。それに、こうした催しがあること自体、京劇の普及定着を示すのか、衰退に抗する単発的な動きなのか、京劇のアマチュア愛好者の活動についても興味を感じるので、さらに調査してみたい。

次に台湾の伝統音楽の代表的存在である南管(語り物兼器楽合奏)の「望明月: 南管音楽会 (Moon in Your Eyes : Concert of Nanguan)」が2013年3月2日の19:30～演奏庁(リサイタルホール)で予定されていた。演奏団体は江之翠劇場で、チラシの情報によれば、1995年6月の創設と新しい演奏団体ながら、すでにジュリアード音楽大学、紀尾井ホール、パリ・オペラ座への出演を果たしていると言う。演奏曲目は《魚沈雁杳》《杯酒勳》《望明月》《孤棲悶》《梅花操》《懶綉停針》《感謝公主》《拜告將軍》《五面》と、筆者でも同ジャンルの名曲と認識できるものが含まれている。

また、大陸からの芸能諸団体の訪台公演を告知するチラシも多く、例えば「上海崑劇団」(台北国家戲劇院、2013年1月29日～2月3日)は“慶賀兩岸文化交流20周年公演”と銘打っており、《景陽鐘變》ほか計4演目すべて台湾初演と記されていた。そして「天津京劇院」(台北国家戲劇院、2013年4月23日～28日)の演目は《四郎探母》ほか名作が勢ぞろいで、チケット価格は両公演とも最高額が2,500台湾ドルとなっている。

b. 書籍・雑誌

まず、台湾の音楽文化の最新事情を大まかに把握するという目的の下、『台湾音楽閲覧』、『台湾的音楽』、『台湾音楽史』、『文化台湾 新世紀 新容顔』の

4冊を入手した。前2冊はジャンル別に、次の台湾音楽史は時代別に、そして最後の1冊は文化行政の中で音楽の扱い見るといったようにそれぞれにアプローチが異なり、それらの目次を参照するだけでも、台湾の音楽文化を知る上で参考、啓発されるものがあると思われるので、『台湾音楽閲覧』の目次を以下に記しておく。さらには別に機会を設けて一昔前の同類の書と比較してみると、台湾における自国の音楽文化に対する見方がどのように変化しているか察知することができるだろう。

序言	閲覧台湾従古到今的音楽
前言	多様面貌的台湾音楽
第一章	原住民音楽
第二章	台湾福佬系民歌
第三章	台湾説唱
第四章	南管音楽
第五章	北管音楽
第六章	歌仔戯
第七章	歌舞小戯（陣頭）
第八章	台湾客族伝統音楽
第九章	祭祀音楽
第十章	台湾創作流行歌曲
第十一章	中国音楽
第十二章	西洋音楽
第十三章	台湾漢族器楽
結語	徘徊在十字路口的台湾音楽

次に京劇をはじめとする劇音楽については、国立伝統芸術中心籌備處による『兩岸戯曲回顧与研討会論文集卷Ⅰ』および『兩岸戯曲回顧与研討会論文集卷Ⅱ研討会紀実』、鍾寶善『公営京劇団隊之回顧与展望』、章遏雲著、沈葦窗編『章遏雲自伝』、王安祈『金声玉振—胡少安京劇芸術』の5冊を入手した。

上記の国立伝統芸術中心籌備處の2冊は台湾と大陸の劇音楽研究者の論文

が多数収録されており、続く『公宮京劇団隊之回顧与展望』は音楽的研究ではないが、京劇団の組織、運営といった筆者が今まで知見を得るのが困難であった内容が詳細に書かれていることは、今後の研究に益するところ大あると感じている。それから台湾の京劇界を長らく牽引してきたベテラン俳優の伝記2冊を入手できたのは京劇音楽研究を志す筆者には望外の喜びであった。前者は京劇女形の歌唱様式の1つ「程派」の、台湾のみならず大陸を含めての数少ない正統な伝承者で、その生涯について知る意味は大きい。後者は台湾を代表する立ち役の1人で、今回、同書だけでなく、胡少安の舞台映像をはじめて入手したことも合わせて大きな成果であった。

また、現代音楽とポピュラー音楽については、『許常恵音楽史料楽譜第二冊』、『台湾当代作曲家』、『你聽、台東的聲音 台東音楽の手札記』の3冊を購入した。『許常恵音楽史料楽譜第二冊』は許常恵（1929-2001）の簡単な紹介文とピアノトリオ《郷愁三調》作品7（1958年）の楽譜が掲載されているだけだが、台湾を代表するこの作曲家について日本では何故かほとんど取り上げられなくなった状況があり、それを打破するためには是非必要な資料だと判断した。『台湾当代作曲家』は記述対象が物故人と存命するベテランにやや偏ってはいるが、江文也（1910-1983）を筆頭に12人の台湾を代表する作曲家を網羅的に紹介されており、台湾の作曲界がどのようにしてその礎を築いたかを知ることができる。『你聽、台東的聲音 台東音楽の手札記』は、筆者が台北滞在の最後の夜に出かけたライブでゲストの一人として登場したパイワン族の歌手、胡待明を含む少数民族の音楽家（多くは少数民族の発声や音楽語法をポップスに生かして活動している）を10組紹介している。

研究者関連では、日本に縁の深かった人物として筆者も個人的に忘れ難い存在である呂炳川（1929-1986）に関する伝記『呂炳川 和絃外的独白』を入手した。これは「台湾音楽館資深音楽家叢書」というシリーズもの（行政院文化建設委員会の指導の下、国立伝統芸術中心の企画による）で、作曲家、演奏家、音楽学者ら20名の伝記で構成されている。こうした出版は今の日本ではまず考えられないことであり、まさに忸怩たる思いに駆られた。その他、台湾の芸能団体のリストである（『2012台湾表演団体体名録 Taiwan Performing Arts In Focus』）を入手したのは有益であった。そこには新劇の劇団、伝統劇（歌仔戲）

の劇団、舞踊、音楽の順にそれぞれ主要団体組織が写真入りで紹介されている。

(2) 録音・映像資料

台湾の伝統音楽を包括的に知るために最適だという推測の下、DVD『2011年台湾伝統音楽年鑑』、DVD『迎神廟会』、DVD『北管音楽』を購入した。そして、台湾における京劇の変遷あるいは変容と現状を知るための一助として購入したのがDVD『顧正秋劇芸精選3 文姬歸漢』、『顧正秋劇芸精選4 王寶釧与薛平貴』、『顧正秋劇芸精選5 汾河灣』、『顧正秋劇芸精選7 珠痕記』、『顧正秋劇芸精選9 鎖麟囊』である。台湾京劇界の名女優の貴重な舞台映像がこうして残されており、現在、安価で入手できるのは有難い。また、舞台公演だけでなく、京劇の伴奏者にスポットを当てた録音として、CD『梁訓益的平劇文場音楽（民族音楽系列專輯第9輯）』のように、梅派の歌唱伴奏の台湾における第一人者の演奏が、歌唱伴奏のみならず、京劇の背景音楽である曲牌（器楽曲）をも含めて出版されたことは非常に有意義であると言える。解説書は英文併記の立派なもので、五線譜による譜例も豊富である。同解説書の説明文によると、このCDは行政院文化委員会による民族音楽CD録音出版プロジェクトシリーズ（『民族音楽系列專輯』）の一枚ということで、同プロジェクトで出版されたものを解説文から書き写すと次のようになる。

第一期

1. 侯佑宗的平劇鑼鼓
2. 賴碧霞的台湾客家山歌
3. 潘玉嬌的乱弹戲曲唱腔
4. 孫毓芹的古琴音楽
5. 陳冠華的台湾福佬民間音楽
6. 楊秀卿的台湾説唱

第二期

7. 台湾的南管音楽—「曲」
8. 邱火榮的北管後場音楽
9. 梁訓益的平劇文場音楽

こうした出版物は近年の日本ではまったくと言って良い程取り上げられていない現実を思うと、筆者は中国音楽研究者として落胆と義憤を感じざるを得ない。さらに、比較的最近の京劇の変化を知る上で有用と思われるのが、国立国光劇団のDVD『伝統経典 - 美猴王』、魏海敏主演による京劇のDVD『戲裡帝王家 秦香蓮』と『魏海敏古典劇場—大師経典、極致綻放』である。前者の台湾の孫悟空劇を大陸と比較してみるのも興味深いが、それよりも今やベテランとして伝統劇だけでなく、新しい創作京劇にも意欲的な名優、魏海敏の映像を入手できた意義は大きい。

中国器楽（国楽）の重鎮として台湾における箏の教育、普及に多大な業績を残した人物として梁在平を外す訳にはいかないと考えて、CD『箏 梁在平演奏』（諦聴文化事業有限公司、1994年）を購入した³。その他、筆者の近年の関心事である台湾の少数民族の音楽とポップスの融合させた歌唱スタイルを実践している著名なアーティストとして、ライブでその歌を見聞して知った⁴ 胡徳夫のCD『胡徳夫 忽忽』を香港で入手できたことは幸運であった。

このように音楽資料を概観しただけでも、それらは音楽文化における台湾のアイデンティティへの模索行動であり表現であると筆者には感じられる。台湾（人）が、国家としてあるいは民族としてのアイデンティティを模索する様子は、最近の映像作品にも反映されていることと合わせて考えて見れば、より納得されるかも知れない⁵。

2. 香港で収集した音楽資料

香港でも台北と同様の手法で、以前から承知していた書店などを巡回しつつ、新しい入手場所をも知ることができた。

(1) 文字資料

香港におけるこの方面の収集は、音楽のみならず映画、演劇にも及んで台北より広範なジャンルに渡った。全体にコンサートやイベントの主催者、出演者、内容などに大陸の団体、演奏者の関与が当然ながら増加していることはもとより、さらに台湾やアジア諸国から人と物の流入も顕著に見られ、香港における文化状況が1997年以降の大きく変化したことを感じ取った。



写真4 旺角地区にある古書店

a. チラシ・小冊子類

まず、上演スポットのガイド冊子として非常に有用だったのが『01/2013 芸術地図 ARTMAP』である。芸術館／文化中心 (Art Museum / Cultural Centre)、文化機構 (Cultural Institute)、另類芸術空間 (Alternative Art Space)、芸術資料中心 (Art Resources Centre)、画廊 (Gallery) と各項目別にホールやスペースなどがその開催イベントとともに記されており、それで香港における文化施設の所在と上演スケジュールが一目瞭然となる。

次に、『城市電腦售票節目 URBITX PROGRAMME1-2 月 Jan-Feb,2013』はそうした文化施設のイベントスケジュールを大まかに把握できるのが便利で、伝統芸能はもちろん、ポップス、ミュージカル、クラシック、演劇、映画まで実に多様なジャンルが含まれており、そこに記されている（中国語および英語）スポットの公演チケットはネットで購入が可能となっている。

それから、それぞれの会場ごとの小冊子も出ているので、それらを見れば上演プログラムやキャストに関して、より詳細な情報の入手が可能であり、今回は香港大会堂、香港文化中心、高山劇場、元朗劇院、大埔文娛中心、香港体育館をはじめ主要場所の小冊子を多数収集したが、それらの詳細の検討は後日改めて機会を設けることとし、本稿では中でも新しく、ユニークだと感じられた『西九大戲棚 2013 城市記憶（2013.1.30-2-16）』について紹介するに止める。英語表記の WEST KOWLOON BAMBOO THEATRE からも容易に察せられるように、旧曆新年期間中限定の臨時の小屋掛けのようで、いわば伝統的年中行事の一環としてのストリートオペラ上演（街戯）の現代版といったところだろうか？ 設置場所は西九文化区広東道入口 [消防局側] で、プログラム項目は下記の通り多彩なラインアップとなっている。

- (1) 大戲棚市集 (BAMBOO THEATRE FAIR)
- (2) 戲曲中心設計比賽展覽
(XIQU CENTRE DESIGN COMPETITION EXHIBITION)
- (3) 青年粵劇 (YOUTH CANTONESE OPERA)
- (4) 中国舞蹈 (CHINESE DANCE)
- (5) 当代音楽 (COMTEMPORARY MUSIC)

(1) は食品と手工芸品のフェア、(2) の詳細は不明だが、伝統芸能の劇音楽のデザインコンクール受賞作の展示のようである。(3) は粵劇の舞台公演、(4) は文字通り中国舞踊の公演、(5) はいわゆる現代音楽ではなく、ポップス系で英語表記によれば Vocal bands、Vocal percussion となっているので、アカペラで様々なジャンルの歌が披露されるものと思われるが、出演予定者の一人にヴォイスパーカッショニストの北村嘉一郎（日本）という名が見える。

また、香港芸術祭に関しては『第41回香港芸術祭 Programme & Booking Guide』によると、伝統音楽芸能関連の公演自体が少なく、地元の粵劇（3月7日～10日、油麻地戲院）以外では、中国国家京劇院による《老旦名劇選演》（3月7日、8日、大会堂音楽庁）と《慈禧と徳齡》（3月9日、10日、演芸学院歌劇院）の2公演と《戲偶人生 Hand Stories》と題された布袋戲（指人形劇）の1公演（3月12日～15日、油麻地戲院）である。

今回の芸術祭（2月21日から3月22日）に準備された演目を一瞥した印象としては、総じて多彩ではあるが、筆者は以前ほどのインパクトを感じ取るまでには至らなかった。恐らく、それは芸術祭に集中的に良質の上演が集められた昔時とは異なり、香港のエンタテインメント界における平時の上演が多様化し、内容的にも充実したためではないかと考える。そして、そのことは下記の状況を見ても明らかであると思う。

次に個別の公演チラシから特に注目したものを中心に取り上げると、劇音楽では当然ながら、粵劇のものが大半を占め、京劇が若干、それ以外では越劇の一枚のみで、粵劇については枚挙に暇がなく、その他についても特に突出した特徴は感じられないので今回は省略する。

それから、香港の伝統器楽合奏では広東音楽、潮州音楽に自然と目が向いた。それらのジャンルのコンサート（一部解説付き）やレクチャーのほか、教室の受講者募集もあって、伝統への回帰、見直し、そして新たな対峙の姿勢として注目された。そうした催しは以前も単発的に行われていたものの、香港社会はその保護、推進には消極的だったと記憶するが、今や香港文化のアイデンティティを示すものとして、某かの宗旨に基づいてかなり積極的に行われている印象を受けた。「伝統文化の再現」と題された油麻地戲院のシリーズ公演も同様の動きと思われ、いつから、何故そうした傾向が表れたかを探るのも、また別の意味で興味深く、見逃せない現象である。以下、香港を代表する語り物音楽の南音、および器楽合奏の広東音楽と潮州音楽によるシリーズコンサートの情報を記しておく。

「聆歌聴語」南音演唱會

- (1)2012年12月16日7:30p.m. 地水南音と粵曲南音の違い
- (2)2012年12月29日7:30p.m. 南音の音楽および節付けの方法
- (3)2012年12月31日8:00p.m. 《玉簪記・月下琴桃、夜偷詩稿》
- (4)2013年1月1日8:00p.m. 《拜月記》ほか
- (5)2013年1月2日8:00p.m. 《嘆五更》ほか
- (6)2013年1月5日8:00p.m. 「粵樂港中尋」粵樂硬弓組合音楽会
- (7)2013年1月6日8:00p.m. 潮州音楽専場
- (8)2013年2月12日8:00p.m. 「歌壇粵樂宗師 - 尹自重」音楽会

(1)(2)はそれぞれ陳麗英と杜泳、唐健垣と杜泳によって香港文化中心で行われる入場無料のレクチャーで、(3)(4)(5)は上記の解説者に劉志光を加えたメンバーによるコンサートである。(6)は「硬弓」と呼ばれる広東音楽の初期の楽器編成によるアンサンブルによるコンサートで、二弦、提琴といった今は演奏される機会の少ない楽器（いわゆる胡琴の一種）が含まれていることが注目された。(8)は広東音楽の作曲家、演奏家として活躍した尹自重を記念するもので、中国楽器のほかにヴァイオリンやサクソを含む、今日普通に見られる広東音楽のアンサンブル形態で、1940年代一世を風靡した尹の名作が披露される予定が記されている。(7)は文字通り、潮劇の演唱も含む潮州音楽の名曲コンサートで、香港社会における潮州人の存在感の大きさを示すものと言えるが、以上のようなコンサートを、二胡をはじめとする伝統音楽とは言い難い極めて限定された器楽にしか視野に入れない日本で見ると可能性は全く期待できないのは、一人の中国音楽研究者として遺憾の極みであると言わざるを得ない。

新しい中国器楽では、やはり香港中楽団の活躍が際立っているが、それ以外にも演奏団体が随分設立されたようで、例えば、香港城市中楽団の公演「中楽名曲齊齊賞」（2013年1月5日、西灣河文娛中心劇院、1月27日、元朗文娛中心演奏庁、2月2日、大埔文娛中心演奏庁）もあり、ここでも演奏者は大陸の音楽家が多数を占めている様子が伺える。その他、任濟医院主催による中国楽器チャリティコンサート「《金鐘の星》名家名曲中楽音楽会」（2013年1月20日、7:15p.m.～葵青劇院演芸庁）は演奏者のみならず、総合プロデューサー：

郁虹（国家一級演奏家、古筝）、芸術総監督：徐沛東（中国音楽家協会副主席）、王慧芬（劉天華阿炳中国民族音楽基金会名誉理事長）というように大陸の音楽家が名を連ねている。タイトルの「金鐘」とは大陸で年に一度優れた音楽家に与えられる金鐘賞のことで、同コンサートの出演者はその審査員と受賞者で占められている。そしてそれは大陸の『音楽週報』（2013年2月27日）4面でも報道されており、それによれば翌日、座談会が催されたとあり、まさにこれも大陸と香港との密接なつながりを象徴する一例であると言えよう。

続いて、「南蓮園地」は瀟洒な冊子のデザインもさることながら、今回はじめて存在を知った新しい上演スポットとして、またプログラム企画も内容的に多様な点で注目された。場所は九龍鑽石山鳳徳道60号と、地下鉄の鑽石山駅から近く、多目的ホールながら王国潼の二胡演奏会、日本箏楽の演奏会、古風雅集の演奏会、福建南音の音楽会、《落花無言》王梓静琵琶独奏会と様々なジャンルのコンサートが予定されているのは興味深い（琵琶以外はそれぞれにレクチャーも用意されている）。また、以前から香港に定住していた王国潼（元北京の中央民族放送楽団の首席二胡奏者）は二胡の入門講座も開催するなど、現在でも活発に活動していることが知られた。「南蓮園地音楽系列」という文言が見えるので、自主企画のシリーズを行っているのかも知れない。

舞踊関係では、中国舞踊の新作公演「風水行」もあったが、それよりピアノ協奏曲「黄河」とともに返還以前の香港では上演の実現が困難であった上海バレエ団による「白毛女」の香港公演が迫っている（2013年1月25日から27日、香港文化中心大劇院）ことに興味を引かれた。オリジナルキャストの来訪も話題の1つであるが、チラシの文章中の「（上海バレエ団の日本公演は）1972年日中国交回復を促進したという」下りが一際目を引いた。そして、それは大陸とどのように対峙するか模索する香港の姿もそこに反映されているように感じられた。その他、芸術系教育機関の広報冊子や映画・演劇では映画祭や演劇の通常公演のチラシを少数ながら集めることができたことは、香港の文化活動を広い視野からとらえる上で有益だった。それらについても別途テーマを設定した上で、改めて紹介したい。

b. 書籍・雑誌

今回は中国音楽に関する書籍や雑誌の収穫は少なかった。雑誌は2点のみの購入で、1点は粵劇の雑誌『粵劇曲芸月刊第200期』である。同雑誌は1993年4月の創刊（月刊誌）で、筆者は前回の香港訪問時に購入したことがあるので、その存在は承知していたが、日本で入手することは困難であるため、その後の出版状況が気になっていたところ、今回は200期を購入（書店ではなく露店やコンビニでの販売が多い）し、粵劇の最新動向を知ることができた意味は大きい。

もう1点は胡恩威編『文化視野 CULTURAL VISION 01』の創刊号で、奉納演劇としての粵劇や香港の文化行政に関するものなど、香港の文化事情を多角的に分析した記事が掲載されている定期刊行物に出会ったことは幸運であった。

書籍は、筆者自身の興味関心の変化に伴い、中国音楽以外に関するものが自然に視界に入って来るようになった。そういう意味で、下記の書籍からは現代の香港の文化研究者たちがどのように日本の文化を見ているかを知るのに参考となる予感がする。

李培徳編『日本文化在香港』は、人類学、社会学など香港の新進気鋭の学者たちによる日本文化論で、映画、言語、食文化など広範囲に及び、香港におけるそれらの受容の問題について詳しく論じている。湯禎兆『日本進化 流行文化解毒』は現代の日本文化、とりわけ映画や小説（北野武、村上春樹ら）といわゆるサブカルチャー（草食系男子など）を中心に優れた考察を展開している。羅展鳳の2書（『電影×音楽』、『流動的光影声色』）は、欧米、中国、香港および日本の映画音楽、とりわけ映像作品における音楽や音の効果、影響、役割などを多角的に論じており、さらに熟読すれば筆者の映像人類学への関心をさらに高めることつながりそうである。

(2) 録音・映像資料

こちらは大量に出版されていることをある程度予想していたが、実際の状況はそれを上回るもので、購入対象の選定に苦慮したが、筆者自身の今後の研究のために有用であると思われるものを厳選した。

香港を代表する劇音楽といえば、やはり粵劇である。DVD『龍鳳争掛帥』とDVD『帝女花』を購入したのは、前者の演目は拙稿『地球の音楽 59 多彩な声の絵模様 福建の語りものと広東の劇音楽』にも収録されており、筆者自身がマレーシアのパナンで華人の粵劇団をフィールドワークした時の上演演目の1つであり、この先、香港の粵劇団による上演を参考に両者の比較を試みたいと考えたからである。後者は粵劇の定番中の定番で、筆者は同じキャストによるLPレコードを所持しているが、その映像は今回はじめて入手した。

そして、意外に思われる向きがあるかも知れないが、京劇は以前から香港でも重要な存在である。さすがに、香港の京劇団、あるいは俳優の公演を収録した映像は見られなかったが、大陸のものが大量に販売されていた。『京劇 穆桂英掛帥』は梅蘭芳の最後の新作京劇で、筆者はその息子、梅葆玖の舞台を香港で見た経験があり、大陸での同演目の中継録画ビデオ映像も所有している。そのような演目を次の世代がどのように演じているのか、京劇の変容を探る上で恰好の素材と考えた上での購入である。『京劇 白馬坡』は拙稿『地球の音楽 58 京劇音楽の真髄』にも収録されている演目で、それは台湾の京劇団によるものだったが、今度は大陸のキャストによる映像を手に入れたことで、両者の比較を試みる準備が整った。

伝統器楽では、広東音楽に次ぐ、香港の伝統器楽合奏の1つの潮州音楽の映像自体が珍しく、現在の名手たちの存在を知ったことが有益であった。購入した2点のうち『潮州弦詩（一）黄徳文專輯』から収録曲を次に写しておく。

- (1) 関公過五関（鑼鼓楽） 司鼓：黄玉鵬、領奏：蔡鋭輝、張彦維
- (2) 柳青娘（弦詩） 演奏：黄徳文
- (3) 話豊年（潮箏、軽三重六調） 演奏：黄楚英、笛子：陳奕夫
- (4) 玉壺買春（弦詩） 演奏：郭焱書
- (5) 二串（細楽） 笛子、洞簫、竹弦：陳奕夫、古箏：黄楚英

新しい中国器楽では、香港のみならず、大陸、台湾などへも影響を及ぼす新しい中国器楽合奏の実験の場として重要な役割を果たしている香港中楽団の25周年記念イベントを収録したDVD『世紀中楽名曲頒獎音樂会』を入手した

ことは、以前は同楽団の映像はおろか、録音さえも制作されなかった状況を考えるとまさに隔世の感がある⁶。

中国の近現代音楽については、従前より筆者は黄自（1904-1938）の作品に関心を持ち続け、代表作のカンタータ《長恨歌》はピアノ伴奏版スコアを所有していることもあって、CD『長恨歌及林聲翕声楽作品精選』に遭遇し、その新しい音源を入手したことは、同曲の本格的な紹介に向けて貴重な資料となると考えている。香港流行音楽を巡っては、いわゆるメジャーものよりも、インディーズへの関心が高まっており、音源や映像を収集したいところだったが、時間の関係で『my little airport 香港是個大商場』の購入に止まった。

3. 結論

以上の考察の結果は次のようにまとめることができる。

(1) 台湾の音楽文化には、全体として台湾ローカルの伝統音楽芸能ジャンルを中心に据えた上で、大陸伝来の諸ジャンルを排除するのではなく、より広範囲で積極的に吸収しようとする気配が感じられた。従来は、建て前上、京劇など大陸のジャンルが半ば強制的に中心に置かれ、多数の支持層を抱えているにも関わらず台湾固有の音楽ジャンルは隅に追いやられていたが、現在はそれらの新しい関係性が形成されて多様化していることが分かった。

(2) 香港の音楽文化からは、恐らく中国への返還を機に中国大陸からのさまざまな影響が及んでいることが看取され、そうした状況下、台湾と同様にローカルの音楽ジャンルを重視し、香港アイデンティティを模索する動きが随所に感じられた。大陸への迎合、対立、どちらにせよ、それとの対峙を回避することは不可能かと思われた。

最後に、今回収集した諸資料の中国音楽芸能研究における有用性について若干の補足をすれば、次のようになるだろう。中国音楽はレコードの創成期から大量の録音が残されており、資料的価値の高いものが非常に多い。近年はこれに映像が加わり、特に劇音楽においてその有用性は論を待たない。しかしなが

ら、日本で発行された中国音楽のディスクは、アナログレコードの時代はまだしも、特に CD の普及以降、中国音楽の CD に付帯する解説文を音楽学者が執筆している例は非常に稀で、アマチュア愛好家によるものが氾濫しているという奇妙な状態が継続している。もっとも、アナログ時代に出て話題を呼んだ日本コロムビアの『史料としての SP 原盤復刻 中国伝統音楽集成』（1980 年）でさえ、曲目解説に中国音楽研究を専門とする音楽学者は一人も関わっておらず、中国文学など中国の文化には何らかの専門性を有した人々が執筆を担当しており、実際、収録音源の価値や楽曲構造など基本的な情報はほとんど明らかにされていないという例もあることを考慮すると、いずれは、然るべき音楽学者によって全面的に書き直されるべきものであると考えられる。

特に近年の二胡ブームとも言えるような中国音楽に対する偏狭的受容が激化している今日の日本では、本当の中国伝統音楽の録音・映像制作の可能性はもちろん、中国台湾香港で出版された輸入盤でも、正しくセレクトされて、何らかの形で紹介される可能性はほとんどないと言って良いだろう。したがって、長期間中国音楽研究に携わって来た一人として、中国音楽をより深く知るためには、本来優先的に触れるべき録音・映像資料をできる限り公の場に供する義務があるとの認識の下、今回のフィールドワークで収集した諸資料の意義を示すべく、啓発的意味を込めて執筆したのが本稿である。それは、冒頭で言及した拙稿 2 篇と合わせて、このままでは益々歪んでいく日本における中国音楽への理解の是正を喚起するための、いわば「忠告」ということができる。

[注]

¹ 広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学紀要 XXV2013.3.22 掲載の「都市の音楽芸能をフィールドワークする～台北音楽紀行」および愛知県立芸術大学紀要 2014 年 3 月掲載の「都市の音楽芸能をフィールドワークする～香港音楽紀行」

² 同書の pp.146-147

³ 収録曲は古曲よりも自作品が多く含まれている。

⁴ 拙稿「都市の音楽芸能をフィールドワークする～台北音楽紀行」を参照。また『ガーランド世界音楽百科辞典』の台湾ポップスに関する記事でも紹介されている。

⁵ 例えば、映画「台湾アイデンティティ」→ <http://www.u-picc.com/taiwanidentity/>

⁶ このコンサートに関しては拙稿「音楽」『中国年鑑 2004』でも言及している。

参考文献

- 増山賢治『地球の音楽 58 京劇音楽の真髄 北京・香港・台湾・東京の京劇』VTCD-58、日本ビクター、1992年
- 増山賢治『地球の音楽 59 多彩な声の絵模様 福建の語りものと広東の劇音楽』VTCD-59、日本ビクター、1992年
- 増山賢治『中国音楽の現在～伝統音楽から流行音楽まで』（東京書籍、1994年）
- 増山賢治「音楽」『中国年鑑 2004』（創土社、2004年）
- 増山賢治「都市の音楽芸能をフィールドワークする～台北音楽紀行」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学紀要 XXV』（2013年3月）
- 増山賢治「都市の音楽芸能をフィールドワークする～香港音楽紀行」『愛知県立芸術大学紀要 No. 43』（2014年3月刊行予定）
- 『音楽週報』（2013年2月27日付）

台湾、香港の購入資料一覧表

【台湾】

[文献資料]

- 陳郁秀編『台湾音楽閥覧』玉山社出版事業股有限公司、1997年8月（第9刷2009年11月）
- 鍾寶善『公營京劇団隊之回顧与展望』楽韻出版社、1999年6月（再版2010年7月）
- 『兩岸戲曲回顧与研討会論文集卷Ⅰ』国立伝統芸術中心籌備處、民国89年（2000年）1月
- 『兩岸戲曲回顧与研討会論文集卷Ⅱ 研討会紀実』国立伝統芸術中心籌備處、民国89年（2000年）1月
- 王安祈『金声玉振—胡少安京劇芸術』国立伝統芸術中心、民国91年（2002年）
- 明立国『呂炳川 和絃外的独白』時報文化出版企業股份有限公司、2002年2月20日
- 梁翠苹『許常惠音楽史料楽譜第二冊』国史館、民国91年（2002年）12月31日
- 呂鈺秀『台湾音楽史』五南図書出版公司、2003年10月（第7刷2011年10月）
- 陳郁秀『文化台湾 新世紀 新容顔』行政院文化建設委員会、2004年2月1日
- 顔緑芬・徐玫『台湾的音楽』財団法人群策会李登輝学校、2006年1月（第3刷2010年10月）
- 『2012 台湾表演団体体名録 Taiwan Performing Arts In Focus』文化部、2012年9月28日

[錄音資料 (CD)]

『箏 梁在平演奏』諦聽文化事業有限公司、1994 年

『梁訓益的平劇文場音樂 (民族音樂系列專輯第 9 輯)』行政院文化建設委員會、民國 86 (1997 年) 年 8 月

[映像資料 (DVD)]

『台灣海峽兩岸戰事檔案』美安國際企業有限公司、HJ085、出版年代不明

『台灣崛起 戰後與二二八事件 (1945-1949)』瑞訊文化事業有限公司、出版年代不明

『顧正秋劇芸精選 3 文姬歸漢』中華電視股份有限公司、出版年代不明

『顧正秋劇芸精選 4 王寶釧與薛平貴』中華電視股份有限公司、出版年代不明

『顧正秋劇芸精選 5 汾河灣』中華電視股份有限公司、出版年代不明

『顧正秋劇芸精選 7 珠痕記』中華電視股份有限公司、出版年代不明

『顧正秋劇芸精選 9 鎖麟囊』中華電視股份有限公司、出版年代不明

『戲裡帝王家 秦香蓮』國立台灣傳統藝術總處籌處、民國 97 年 (2008 年) 10 月

『2011 年台灣傳統音樂年鑑』國立台灣傳統藝術總處籌處、出版年代不明

『魏海敏古典劇場—大師經典、極致綻放』財團法人公共文化事業基金會、2011 年 4 月

『迎神廟會』DVS-01、峻愷多媒体企業有限公司、2012 年 1 月 15 日

『北管音樂』DVS-02、峻愷多媒体企業有限公司、2012 年 1 月 15 日

【香港】

[文獻資料]

章遏雲著、沈葦窗編『章遏雲自傳』大地出版社、民國 74 年 (1985 年) 9 月

顏綠芬編『台灣當代作曲家』玉山社、2006 年 12 月

黃健庭『你聽、台東的聲音 台東音樂的手札記』台東縣政府、財團法人台東縣文化基金會、2010 年

『粵劇曲芸月刊第 200 期』(鄧氏兄弟資料研究出版公司、2012 年 12 月)

胡恩威編『文化視野 01』(進念·二十面體 E+E2012 年 9 月)

李培德編『日本文化在香港』(香港大學出版社、2006 年)

湯禎兆『日本進化 流行文化解毒』(生活書房、2012 年 5 月)

羅展鳳『電影×音樂』(三聯書店、2011 年 11 月)

羅展鳳『流動的光影声色』(廣西師範大學出版社、2007 年 11 月)

[錄音·映像資料]

DVD『傳統經典 - 美猴王』國立國光劇團、民國 91 年 (2002 年) 1 月 (97 年 11 月三版)

DVD『龍鳳爭掛帥』新天地娛樂發行有限公司、SD2048-N、出版年代不明、『帝女花』新天

- 地娛樂發行有限公司、WDV 8001N、出版年代不明
- DVD 『京劇 穆桂英掛帥』齊魯電子音像出版社、MPEG-2、出版年代不明、『京劇 白馬坡』
中國唱片上海公司、HVCD-0273、出版年代不明
- DVD 『潮州弦詩（一）黃德文專輯』廣東音像出版社、GYD-2606、出版年代不明
- DVD 『潮樂大典 2』廣東音像出版社、GYD-2662、出版年代不明
- DVD 『世紀中樂名曲頒獎音樂會』現代音像有限公司、HKCO-DVD-8-2003-10、出版年代不
明
- CD 『長恨歌及林聲翕聲樂作品精選』HRP7224-2、HUGO、2001 年
- CD 『my little airport 香港是個大商場』hrcd014、維港唱片、2011 年
- CD 『胡德夫 忽忽』參拾七度製作有限公司、WFM05001、2005 年